

宇都宮 博
京都教育大学 助教授

中高年における夫婦関係の問い直しと将来展望に関する調査研究

本研究では、人生の半ばに位置する中高年者の「夫婦としての将来展望」と「個としての将来展望」の特質を、夫妻間の相互性とギャップを中心に検討するとともに、過去の結婚生活に対する評価が将来展望に与える直接的な影響と、自己のコミットメントを介しての間接的な影響について、夫と妻とに分けて分析した。分析対象は、夫妻のうち少なくとも一方が 40 代もしくは 50 代で、かつ公立学校（小・中学，高等学校）で教員をしている者とその配偶者 208 名（男性 103 名，女性 105 名）である。このうち、206 名は夫婦での協力であった（103 組）。主な分析結果は、以下のとおりである。

「夫婦としての将来展望（対結婚生活）」と「個としての将来展望（対個人）」は、ともに楽観的将来展望と悲観的将来展望の 2 因子からなり、両者は夫妻ともに比較的強い相関がみられた。一方で有意差も確認され、夫妻共通して楽観的将来展望は「夫婦としての将来展望」が高く、悲観的将来展望は「個としての将来展望」が高かった。将来展望のあり方によって対象者を分類したところ、大きく 4 つのタイプが確認された。すなわち、「楽観的将来展望が非常に高いタイプ」、「楽観的将来展望が優位なタイプ」、「悲観的将来展望が優位なタイプ」、「相対的に楽観と悲観とが拮抗しているタイプ」である。

過去の結婚生活に対する評価が将来展望に与える影響については、夫と妻とで異なる結果が示された。夫では、楽観と悲観、対個人と対結婚生活を問わず、自己のコミットメントは関連せず、過去の結婚生活に対する評価のみが将来展望を規定していたのに対し、妻の楽観的将来展望に影響を及ぼしていたのは、現在の自己の人格的コミットメントであった。本研究を通して、過去の夫婦の生き方が現在のコミットメントに反映されやすいことと、とくに妻の場合は現在のコミットメントの問い直しによって、将来展望が変容する可能性も示唆された。